

「保健医療科学」
第 54 巻 第 1 号 予告

化学物質の内分泌かく乱作用（いわゆる環境ホルモン）に関する対策の現状と今後

野生生物観察の重要性（仮題）	井口泰泉
内分泌かく乱作用に関する疫学的アプローチにおける課題（仮題）	岸玲子
ヒト由来・天然由来の内分泌かく乱作用物質に関する諸問題（仮題）	田中宏明
一般環境中の化学物質の分析について（仮題）	柴田康行
ほ乳類における内分泌かく乱作用に関する試験法の実際と限界について（仮題）	青山博昭
内分泌かく乱作用に関するリスクコミュニケーションについて（仮題）	有田芳子
内分泌かく乱化学物質問題に関する産業界の取組みとしてのレスポンシブル・ケアについて（仮題）	岩本公宏
ごみ焼却施設周辺におけるダイオキシン汚染に起因する周産期の健康影響に関する疫学研究（仮題）	丹後俊郎
化学物質の内分泌かく乱作用に関する環境省の今後の対応方針について	上家和田

編 集 後 記

本号の特集は研究評価です。各論文を概観すると、検討すべき項目が以下の二つに整理できることが分かります。一つは具体的な評価基準をどのように設定するか、いま一つは研究評価を行う仕組みをどうデザインするか。前者については普遍的な評価基準を整理したうえで、保健医療福祉分野と関連が深い厚生労働科学研究費補助金に基づく研究を評価する際に、とりわけ求められる視点を整理することに関心が寄せられています。具体的には、行政的観点（緊急性のみならず長期的な展望を含む）ならびに国際的観点の重要性が指摘されています。一方、後者については研究助成に対する概念的枠組みを構築したうえで、公平性と透明性を伴ったシステムをマニュアルなどを用いて明確に提示するという前提に立ち、そのための具体的な手法について様々な報告がなされています。全体をマネジメントする人材の重要性も指摘されています。

上記はいずれも研究評価を行う側からの視点ですが、評価される立場からみた研究評価の捉え方について巻頭言で興味深い指摘がなされています。行政支援研究の特性から戦略計画方式を用いるのが妥当であり、そのためには身の丈相応な目標設定が合理的であるとのことですが、このことは突き詰めれば己を知ることになるのでしょうか。何事も自身の問題に置き換えると理解が深まりやすいものですが、遙か遠くにあるように感じていた研究評価が随分と身近なものになったような気がします。

（井上由起子）